

※発言をそのまま書き起こしたデータを基に、個人情報に関する部分を削除し、文意が通るように修正を行っています。

閉会挨拶

諸葛 宗男 氏（NPO 法人パブリック・アウトリーチ／東京大学）

（司会） それでは、シンポジウムの終わりにあたって、閉会の挨拶を、NPO 法人パブリック・アウトリーチの諸葛宗男さんからお願いいたします。

（諸葛） パブリック・アウトリーチの諸葛です。先ほどのプレゼンの中でもありましたが、1年かけて9回のミーティングを開いて、フォーラムの準備を進めてまいりました。私は、その全ての会合に参加して、準備のお手伝いをさせていただきました。それから、全5回のフォーラムにも全て参加しまして、参加者同士の会話の中には入りませんでしたけれども、ずっと脇から観察させていただきました。

今日のすばらしいプレゼンとパネルディスカッションをお聞きして、最後にまとめとして、3つだけ申し上げたいと思います。

リスクコミュニケーションというのは、先ほど土田先生、谷口先生からお話がありましたけれども、長年原子力の世界でも取り組んでまいりました。しかしながら、これまでのリスクコミュニケーションは、冒頭の木村先生のお話にもありました通り、どちらかという知識提供型のリスクコミュニケーションで、専門家がたくさん持っている知識を提供すれば、原子力施設に対する不安が払拭できるだろうという前提で、長年行なわれていました。

今回のフォーラムは、そのアンチテーゼとして、対話型リスクコミュニケーションに取り組みました。別にこのフォーラムが初めてというわけではなくて、他にもそういう取り組みを始められている先生もたくさんいらっしゃいますけれども、知識提供をしない、ということに徹した試みは初めてです。そこを強調しすぎたせいか、パネリストの方から、もう少し知識提供があってもよかったのではないかとのご指摘がありました。その点は、今後少し工夫が必要かもしれません。あえて、知識提供型ではないリスクコミュニケーションのあり方の道を探るということで、大変すばらしい成果が得られたのではないかと思っています。

実は福島県で、これからのリスクコミュニケーションの重要性が叫ばれています。これまでは、できあがった施設に対して、安全性も確保されているということを説明するためのリスクコミュニケーションが主体でしたけれども、福島県でこれから行なわれるリスクコミュニケーションは、まったくそういう模範解答のない世界のリスクコミュニケーションになってまいります。どうやって避難している方々が、ご自宅に戻って、生活が維持で

きるか。どこまで除染すれば、自分たちが安心して暮らせるだろうかというところに、専門家としてお手伝いをして、その復興のあり方を議論していかなければいけないというリスクコミュニケーションですから、これはまさに対話型のリスクコミュニケーションが重要だと認識されておりまして、そういうところにも今回のフォーラムの成果が役に立てばと考えております。

2点目は、先ほどフロアからのご質問にもあった通り、コミュニケーションが一番重要なのは、やはり立地地域です。立地地域とのコミュニケーションは、これまで国は責任を負う形の役割は果たしておりません。ご存知の通り、電力会社という事業者と、自治体が、安全協定という枠組みの中でコミュニケーションを行なってきたというのがこれまでのスタイルです。これからは、国が前面に立ったコミュニケーションの仕組みを作っていかなければいけない時代に差し掛かっており、そのやり方を今模索しているところです。そのコミュニケーションのあり方に対しても、今回のフォーラムは非常に大きな貢献ができるのではないかという気がしております。

一番重要な点は、このフォーラムの成果は全て文章化されて、パブリック・アウトリーチのホームページに掲載されているという点です。コミュニケーションのルールについても、会場の後ろにサンプルとして置いてありますように、「コミュニケーション・マニュアル」という形で文章化いたしました。また、フォーラムに向けての準備会の議事録も公開されていますから、今後どういう改善をやっていけばいいか、それをどのように国が活用していけばいいかということの手がかりが、山のように残されたような気がいたします。

最後に、福島第一原発の事故は不幸なことでしたけれども、コミュニケーションという面で見ると、私がかねがねおかしい、不思議だと思っていた点があります。私は元々設計出身ですけれども、危険性を排除していくこと、危険性をできるだけ最小化することが、安全の本質です。しかし、これまで、原子力発電所の場合ですけれども、危険性の説明を一切していなかった。「五重の壁があるから安全です」というような、これだけの対策をやっているから安全ですと言うのは、私はおかしいと思っていました。

中にある危険性の説明もしないのに、「五重の壁があれば十分安全です」などと言うのは、これは工学的にもおかしい理屈です。二重の壁で十分安全ならば二重で十分なのですね。もし危険性が高ければ、十重必要かも知れません。それを、「五重の壁があるから安全です」と、なぜ今まで説明してきたのか。まったく理屈に合いません。安全性というのは、内在しているリスクの危険性をどこまで低減しているかということの説明して、ようやく納得できる話だと私がかねがね思っています。これまでのリスクコミュニケーションでは、リスクが内在しているある、危険性があるということ自体をタブー視していたため、おかしなリスクコミュニケーションになっていました。これが「原子カムラ」と言われるようになったひとつの原因です。

それを関係者は今、大いに反省しています。危険性をつまびらかにすることが、相手の信頼を得ていくことになるのではないかと、最近私は感じているところであります。

少し長くなりましたけど、閉会の挨拶に代えさせていただきたいと思います。ありがとうございました。(拍手)

(司会) どうもありがとうございました。

それでは、これでシンポジウムを終了いたします。皆様、お帰りになるときに、記入されたアンケートをスタッフにお渡しくださるよう、お願いいたします。どうもありがとうございました。(拍手)